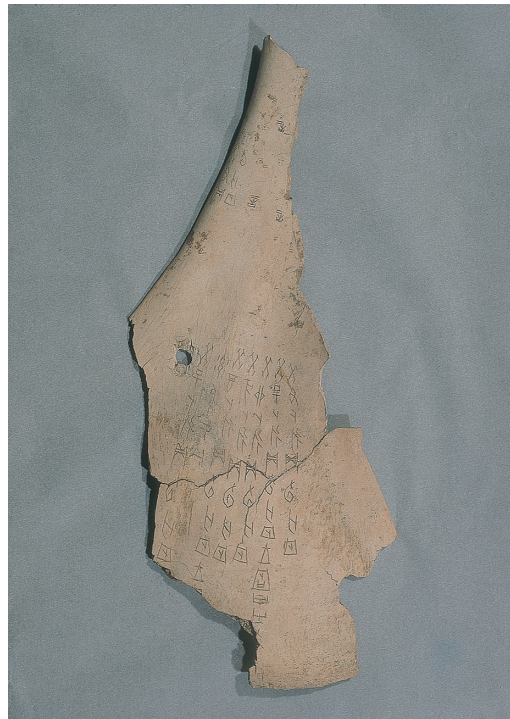


漢字と文化

漢字文化の全き継承と発展のために

京都大学 21 世紀 COE 東アジア世界の人文情報学研究教育據點

第 7 号



目次

国際ワークショップ「近代東アジアの情報——質と量」	2
一都許村訪古録	4
CHISE Conference 2005 レポート	8
三色の筆と XML 七変化	11
東アジア人文情報学研究会の意義	13

国際ワークショップ 「近代東アジアの情報——質と量」

石川禎浩

2005年11月18日(金)に、京都大学人文科学研究所分館会議室において、「近代東アジアの情報——質と量」を主題とする国際ワークショップが開催された。本ワークショップは、人文科学研究所の共同研究班「20世紀中国の社会システム」(班長：森時彦教授)とタイアップして企画されたものである。

本21世紀 COE プログラムにおいて、東アジアにおける漢字情報の流通を、近代という歴史的なパースペクティブから検討することは、必ずしも主たる課題ではない。しかし、今日における人文情報学の対象としての個々の「情報」は、時代により様々な位相を見せるのであって、その実態をひとつの時代(中国近代)に絞って検討してみようというのが、このワークショップのそもそものねらいであった。また、本企画をわざわざワークショップという形式にしたのには、それなりのわけがある。すなわち、本 COE の主幹部門である人文科学研究所は、それ自体学生を持たず、それゆえ教育の対象となる人材は、共同研究班に参加している大学院生(博士課程)、ポスドク生、および若手の研究者にも及ばざるを得ないのだが、彼らに国際的な学会会合での報告、発言、討議の実際を、半ば強制的な参加型の会議方式で体得してもらおうと考えたのである。

中国学の先端領域の研究は、今や多くの場合、中国語を媒介語としてなされている。仮に日本語で優れた研究成果が生み出されたり、発表されたりしても、そのままではそれが国際的な学術世界において認知される保証はどこにもない。また、当たり前なことだが、優れた研究を行ったとしても、それに付随する細かな説明、質疑、再検証などは、それが他者とのコミュニケーションを前提

とする以上、リアルタイムでの口頭対話の能力に大きく依存せざるを得ないのである。

この趣旨に合致する人物として、本ワークショップでのメンター役をお願いしたのは、桑兵氏(中国 中山大学歴史系教授)と森紀子氏(神戸大学文学部教授)である。桑兵氏は、中国はもちろん、世界の中国学学界(特に中国近代史)において知らぬ者のない第一線の研究者である。近著『庚子勤王与晚清政局』(北京大学出版社、2004)をはじめとする清末政治史、思想史、学術史の研究では、当代中国第一と言ってよく、中国政府認定の「長江学者」称号を持つ唯一の歴史分野研究者であると聞いている。人文科学研究所にも、何度か招聘外国人学者としておいでになっており、近年では2003年秋に来日し、当時研究所の有志が中心となっていた『梁啓超年譜長編』の翻訳(訳注)作業に、アドバイザーとして加わって下さった。

桑兵氏にメンター役を依頼したのは、こうした研究実績もさることながら、氏が本務校では多くの留学生を受け入れ、また海外(日本、韓国、アメリカなど)にあっても豊富な学術活動の経験を持っているから——すなわち、非中国語圏の研究者(含学生)との意思疎通のノウハウを知り尽くしているから——である。

もう一人のメンター役である森紀子氏は、我が国の中国近世、近代思想史の専門家である。近著『転換期における中国儒教運動』(京都大学学術出版会、2005)に見えるように、特に近世、近代の儒教と知識人のかかわりについて深い造詣を持っていることは、改めて言うまでもなからう。ただし、「情報」がワークショップの主題テーマであったので、今回の主講演は本来の専門の思想史で

はなく、開港都市青島を舞台とした内外人間の情報流通（ニュースの伝達、デマの流布などを含む）をめぐる摩擦について、歴史的考察を加えていただいた。

このワークショップは、その性質上、報告や討論の模様を広く公開することを目指したものではなく、むしろ通訳などを介しないリアルな討議を実現するためのものだったが、その趣旨に理解を持つ十分な数の参加者（講演者を含めて約20名）を得ることができた。通常の研究班の班員だけでなく、遠くは広島からわざわざこのワークショップに参加するために上洛した大学教員もいたことは付記しておいてよいであろう。

ワークショップは、森紀子氏の主講演（午後1時～）で幕を上げた。森氏の講演「青島の植民化と情報（その時代相）」は、1898年の戊戌変法運動の呼び水となった同年初めのドイツ軍による膠州湾占領とそれに引き続く「文廟破壊事件」が、どのように北京や外地に報道されたのかを、報道記事の転載状況から解明したものであった。そして、「文廟破壊事件」の報道には、変法派メディアによる政治的キャンペーンがあり、そのさいの扇動の言辞に従来の教案と同じ言い回しが見えることが指摘された。

この主講演を受けて、コメンテーターの高嶋航氏（京都大学大学院文学研究科助教授）が情報伝播の面からいくつかの質問を行い、討議がなされた。前述のごとく、このワークショップの大きな眼目は、半ば強制的に国際的な討議の場を再現し、フロアの若い参加者にできるだけその実践に加わってもらうことにあったので、高嶋氏のコメントに続いて、参会者にドンドンと発言してもらった。発言とそれに続く応酬の詳細はここでは割愛するが、高嶋氏のコメントが良い呼び水となって積極的な応酬が続き、満足のいくセッションとなった。

ついで、午後3時より桑兵氏の主講演「晚清の閲報と講報」（中国語）が行われた。この講演は、清末に出現して以来、中国での情報伝達、知識の普及の状況を一変させた「報」（中国の「報」は、

日本語でいうところの雑誌、新聞を含む）について、数量的データを示しつつ、その「報」を通して伝達された情報の量と質、そして速度について概観したものであった。

中国近現代史を研究するものにとって、当時の新聞や雑誌は、まさに基本史料だが、それに盛られた情報が「報」という媒体を通じて伝播することにより、如何なる影響を被ったのかという部分、つまり情報の「入れ物」の部分は、意外と見過ごされやすい。つまり、研究者は記事が伝える内容にのみ目を向けがちで、その記事を載せている「報」については、その様態を当然視しがちなのである。その点では、桑兵氏の講演は、我々が清末の史料に接するにあたって、注意せねばならないことをわかりやすく説明するものでもあった。

桑兵氏の主講演に対しては、コメンテーターの石川禎浩（京都大学人文科学研究所助教授）が清末の識字率について質し、清末の著述者が想定した読者が五四時期の読者像とは大きく異なること、それゆえに文章の中身にも変化があることを補足的に説明した。それに引き続いて討論が行われたが、この桑兵氏のセッションについては、応酬はすべて中国語で行われた。終始中国語で討論を行うことには、若干の懸念もあったが、ふたを開ければ、若手の参加者を中心に、絶え間のない討議が続き、討論予定時間を大幅に超過してもなお議論が終わらないほどだった。これには桑兵氏が、巧みな応答によって参加者のさらなる関心を引き出してくれたという面が多分に関係していよう。

今回、準備期間と予算の関係上、ワークショップのメンター役にあたる外国人研究者は、わずか桑兵氏1名にとどまったが、それはこのワークショップの意義をいささかも低めるものではなかった。逆に、メンター役としてその任にふさわしい桑兵、森紀子の両氏を得たことは、今回の企画を、小規模で濃密な共同作業を意味する「ワークショップ」の本来の意味に近づけるのに、大きく与ったと言えるだろう。

一都許村訪古錄

鍾 翀

近年來有關中國古村落的研究，在社會學、文化人類學、建築學等領域引起學人的關注。但在此類研究中，通過田野調查和歷史地理考證、將村落的存續史追溯到千年以上的實例還非常少見，至今見諸報告者，僅有河南省修武縣周村（愛宕元『唐代地域社會史研究』）、湖南省江華縣迴龍寨（龔江「一個具有二千多年歷史的村寨」，刊於『歷史地理』第三輯）等數處而已。本文將簡單介紹筆者在近年田野調查中發現的一個千年古村落——浙江省東陽縣一都許村。

位於東陽縣北江盆地西南緣、縣城吳寧鎮東4 km處的一都許村，因民國以前隸屬本縣“一都”、且為舊一都範圍內唯一的許姓村落而得名。除了村名有些特殊之外，是當地並不起眼的一個中等規模的宗族村落（圖1）。全村在1980年代中期有132戶565人（『浙江省東陽縣地名志』1986年），至今也不過200戶左右。村民中70%以上為許姓，屬於統稱“東陽許氏”的一個覆蓋本縣許姓絕大部分人口（1.6萬餘人）、包含複雜分枝結構的上位宗族【High Order Lineage】。至於其它陳、樓等姓遷入本村的歷史，則都在口傳可以追溯的明清時代以降。

之所以能將一都許村史上溯千年，主要在於本村現存一座集紀年、氏族、里名於一體的南朝陳代題刻的古井（圖2）。關於這座古井的發現，筆者與金華文物局趙一新已有報道（『文物』刊行予定）。在此再將近年的後續調查所得，結合與此關聯的文獻、遺跡作一介紹。

先看看古井和井欄銘文的情況。

該井位於村南東陽通往嵊縣公路近旁，至今仍為村民汲水使用。井欄石料是當地常見的紫紅色礫岩。井欄高約40 cm；外沿因受打水繩和磨鏟刀的長年磨損，呈現多道深陷凹槽，但仍可確認其外圈為八

角形，每邊長約35 cm；中為圓孔，直徑約50 cm。井欄頂部離汲水面約90 cm，離井底約2 m，井穴內壁為塊石疊砌。

井欄南側面縱刻銘文兩行（圖3），右行為“陳永定式年”，左行為“紫金里許氏誌”。右行五字及左行中間四字字跡較清晰，右行第四字“式”有一長撇；左行最上一字“紫”僅可辨認上半部右邊的“匕”及下半部的“糸”，經該村村民陳連富（2003年67歲）的回憶，明確為“紫”字；最下一字僅可辨認“言”和“志”的上半部，推測為“誌”字。井沿上原先也有一行銘文，但已嚴重磨損，不可通讀，現殘存“園”、“許”、“立”三字，其中“寅”字僅可辨認其局部的“由”。據陳連富回憶，從前該處依稀可見干支紀年文字，查陳永定二年（558）為戊寅年，故推定此處當為“寅”字。

有關此井的記載見於文獻。清康熙『新修東陽縣志』（日本內閣文庫藏）卷之三載有一都“紫金井”（圖4），本村舊屬一都，文中所指或即此井。清道光二十八年（1848）續修『東陽許氏宗譜』（本文所用宗譜均藏於上海圖書館）卷之廿八載有「紫金上下宅基圖」（圖5），圖中描繪了坐落於本村東南西北四方的所謂“四井四河”。據筆者採訪，相傳“四井四河”由來久遠，為古時許氏先人所創，雖然近年來東井及部分河段已被填埋，但村民們仍可指辨其具體方位。上述繪圖所見“四井”中，最下方（即南面）一座即為陳代銘文古井，在圖上清晰地標識作八角形。本村尚存的“上台門”（圖6）、“祠堂”、“殿”（當地民間信仰“朱相公殿”）、“官路”等處，位置也都與繪圖標識契合。“紫金庵”雖已改作水田，但田塊名仍然襲用，稱為“紫金庵田”，老年人還可回憶起庵內的具體陳設。本村現在還有“紫金亭”等多處遺跡。這些應該都與早年的“紫金里”有著間接的聯繫。

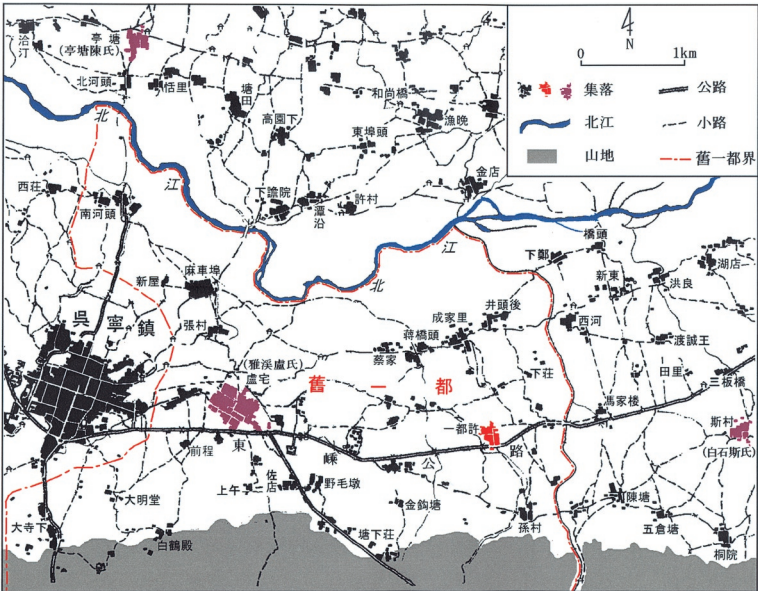


圖 1 一都許村及其周邊

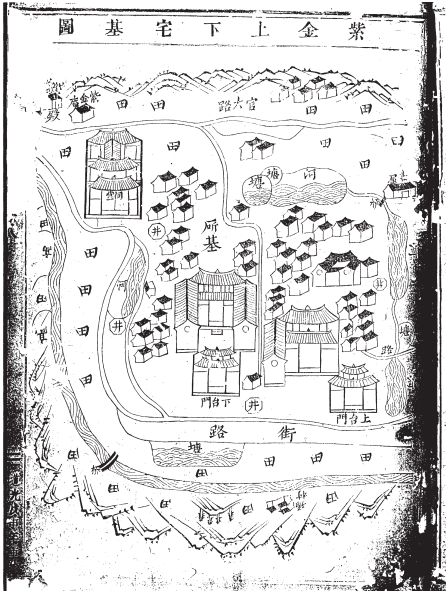


圖 5 「紫金上下宅基圖」(1848年木活字本)



圖 2 南朝陳代題刻古井



圖 3 古井銘文 (558年)



圖 6 上台門 (即「紫金上宅」)

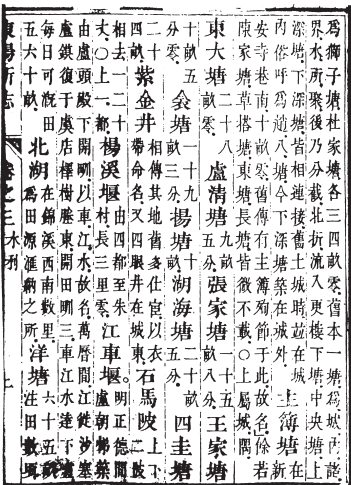


圖 4 「紫金井」記載 (1681年刊本)

進一步查閱宗譜、並通過實地確認，了解到上述繪圖標題“紫金上下宅”即圖中所繪的“上台門、下台門”，它們是本村許氏兩大分枝所居之處，從建築上看屬於浙中鄉村最為常見的“十三間頭”樣式。因此，所謂「紫金上下宅基圖」也就是一都許的村落圖，類似村落圖常見於當地的近代宗譜之中。由此看來，直到清道光年間，在宗譜編纂這樣比較正式的場合，本村仍沿用“紫金”來稱謂村名。

本縣方志沒有記載鄉以下的“紫金里”這類古代里名。至於一都許所屬的昇蘇鄉及一都，現今可見最早記載在上海圖書館所藏的明隆慶『東陽縣志』，其卷一中提到：咸平四年（1001），“舊有鄉三十四，今併為十四。……石室入昇蘇。”又云：“昇蘇鄉在縣之東一、二、三都之地。舊志：管里一，曰石室。”但前述康熙縣志卷一又說：“舊志所載管里，每鄉以一里著稱，諒多缺略。”

不過，在東陽許氏和同屬一都的雅溪盧氏等族的宗譜、以及宋代以來當地文獻之中，“紫金里”偶爾可見。如上述『東陽許氏宗譜』留有“中燁徙居紫金里”、“第六世諱中燁，由西許遷居昇蘇鄉雅兆保号，即今紫金也”的記載；該譜卷之十五還載有鄉賢陳樵於至正二年（1342）所撰「紫金橋記」，其中提到：“吳寧治東五里許，鄉曰昇蘇，里曰雅兆，晉孝孜公裔世居焉。澗水縈汙，南北夾澗，橋其中曰紫金。……宋乾道、嘉熙、嘉定、咸淳間，許氏登科者數十餘輩。……衣冠赫奕，紫金輝映清波，鄉人見而榮之，遂以名其橋，而氏亦得以名橋者名之，而是里亦得以名。”陳樵所記紫金里、紫金橋、許氏的隆盛等，應為當時事實；但將紫金里名由來定在南宋，看來也未作深入調查。又如『雅溪盧氏家乘』云：北宋治平間（1064-1067）始祖自天台移居東陽，至四世祖盧員甫“分遷昇蘇鄉紫金里之雅溪世居焉”。這些記錄都反映了紫金里這一名稱在宋元時代仍有使用。

許姓至今仍為當地大姓，也是本縣最早見於正史的姓氏。『晉書』卷八八載有吳寧（為東陽古稱）人許孜及其子許生，在咸康元年（335）以孝行聞於朝，詔旌表門閭。當地最早的地誌——南朝宋鄭緝之所撰『東陽記』中，也有類似記載（『太平御覽』卷五五九所引）。許孜父子的墓地，在後世成為儒家道德教育基地，得以長期維護。在北宋的一

次墓地維修時，曾出土紀年為吳寶鼎三年（268）的「許氏」買地陶範，此事載於縣志。雖然出土陶範沒有確記這位「許氏」的名字，且紀年也與許孜父子生卒不合，還不能斷定它和許孜父子的聯繫（或許是下面提到東陽許氏遠祖許德等人的墓地），但許氏之在東陽，甚至早於史書記載這一點是可以推測的。

以宗譜創制為表徵的當地宗族組織的形成，盛行於宋元時代的13-14世紀這一點，筆者已有考察（見『漢字文化研究年報』第一輯）。東陽許氏宗譜創於1137年（現存宗譜中收有創修以來歷代遞修譜序，而且至今尚存該族明嘉靖、萬曆間續修的殘本），其時距該族的形成應該為時不遠；而本縣範圍的東陽許氏的宗族統合與重組，則還在此後的元明時代。在這種背景下形成的東陽許氏宗譜，其中關於唐以前的先人世系，不僅舛謬甚多，而且在各分枝譜中也是眾說紛紜。擇其代表性記載歸納而言，三國時許德仕於東陽，晉代許孜父子因孝行聞於朝，其後子孫播遷杭州，五代末許志復歸東陽，逐漸形成現今所見東陽許氏的四大分枝以及非對稱的複雜房派構造（圖7）。

今日的東陽許姓，按其宗譜大抵追尊許德及許孜父子為其遠祖，但卻都以宋初的許志為內紀一世祖。像這樣將擁有萬人以上規模、眾多房派的一大宗族，悉數繫於許志一脈，而此前則多為世代單傳的基幹型構造體系，很是不可思議，未必反映許姓在東陽的真實歷史。這是因為，12世紀的宗譜創修者，不得不利用當時僅存的有限的家族史料和記憶，對一族的早期歷史進行重構乃至創作。這一點筆者在上面提到的考察中也已闡明。比如，東陽許氏宗譜記載的一都許氏的起源（圖7的中燁輩或夢德輩），按許邵以下30年一代推算，大約在12世紀後半葉或14世紀。對於這樣的記載，我們不必遠征南朝古井，只要查閱附近其它宗族的宗譜中偶然留存的女性娶嫁記錄，就可以推翻許氏自我宣稱的起源年代。如本縣現存最早『東陽亭塘陳氏家譜』（明嘉靖九年即1530年抄本）之中，可見到明初14世紀“紫金橋許氏”和“一都許氏”的記錄（圖8）。廣泛查閱宗譜可以發現，此類一都許氏相關記錄時代延綿、數量甚夥，較早者如『校塢曹氏宗譜』（1895年續修）所載“曹箕娶一都許氏（1132-1193）”，年代

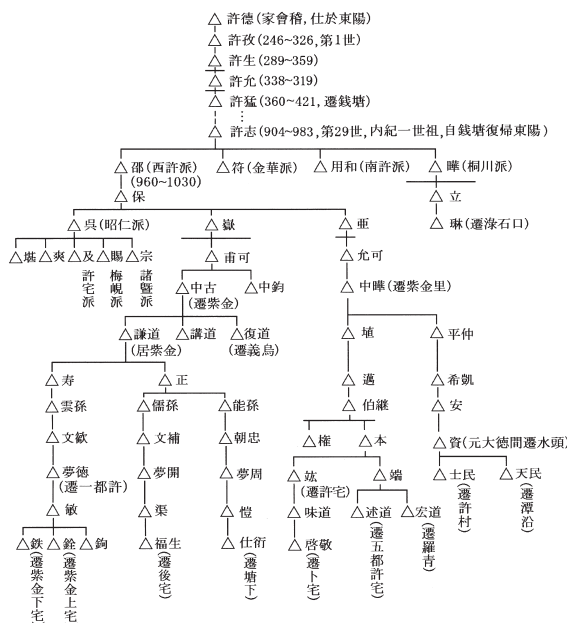


圖7 『東陽許氏宗譜』所見之許氏世系

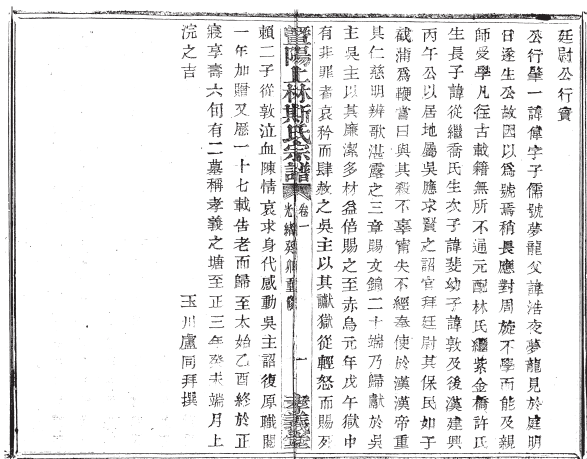


圖10 “紫金橋許氏”（2世紀）

就已溯及南宋初年（圖9）。而關於“紫金橋許氏”的記錄，更可遠追東漢末年，在當地古代名族——斯氏的婚姻記錄之中，就可見到“斯偉（196-266）繼娶紫金橋許氏”（圖10，筆者今後還將對此條記載作進一步的考證）。

可以想像，古時的掘井作業，需要相當的人力和物力。陳代古井的銘記，不僅是為了標明此井的製造者，而且，更有可能是為了表明古井在當時為許氏所有。由此推測其時的紫金里許氏，應該並非僅是孤立的一二農家，很大可能是一個有一定規模的、自然集結的血緣聚落。況且，從陳代古井被納入“四井四河”系統來看，傳說中許氏先人規劃村落

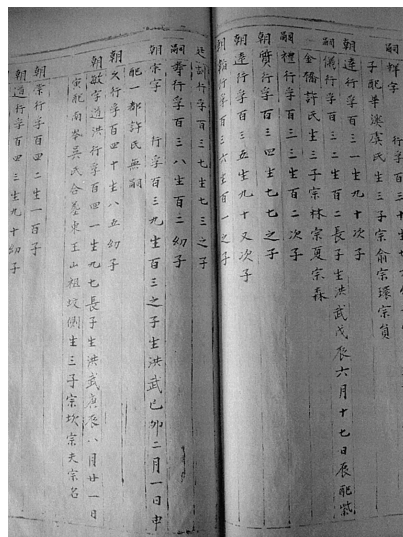


圖8 “紫金橋許氏，一都許氏”（14世紀）

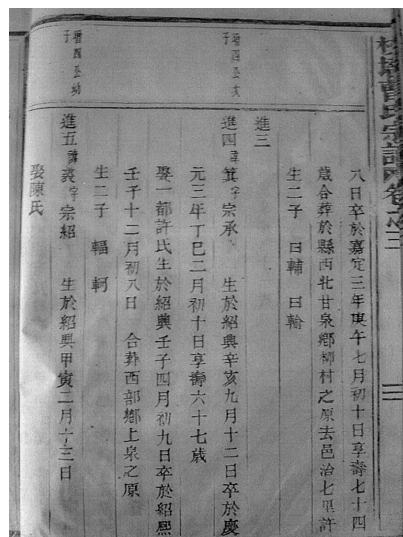


圖9 “一都許氏”（12世紀）

這樣一個背景，也是合理的、可能的。再者，從文物普查來看，趙寧曾提到一都許村的黃馬鈞古墓群，該遺址分布範圍約2000平方米，地表散布錢紋磚，已暴露磚室墓十余座，年代在東晉至南朝間（見『東陽文史資料選輯』第十三輯）。這也從考古角度證明了該村在六朝時期已有一定的規模。

上述種種遺跡和文獻顯示了一都許村許氏的久遠存續史。筆者從前也曾推定，在宋元時代的宗族村落形成風潮之前，很可能有較長一段時間的血緣村落（可看作是宗族村落的原型）的發展史。以上一都許村尋訪所得，成為以上推定的一個有力例證。

CHISE Conference 2005 レポート

守岡知彦

さる10月13, 14日に京都市国際交流会館研修室で開催した“CHISE Conference 2005”はCHISE Projectをはじめとする多言語処理技術に関するイベントで、CHISE Project 関連イベントとしては2003年3月に東京で開催された“CHISE Symposium 2003”, 2003年11月に京都で開催された「書体・組版ワークショップ」に引続き3回目のものである。今回のイベントは1日目はCHISE Project 関連、2日目には全文検索技術の発表が行われ、濃い議論が交わされた。

1日目の発表は著者による「文字データベース 2.0」と題する発表からはじまった。これは2.0ならなんでも良かった、というのはさておき(・_・), CHISE 文字データベースの目指すべき地点を従来の文字データベースや文字処理技術と対比させて述べてみたものである。

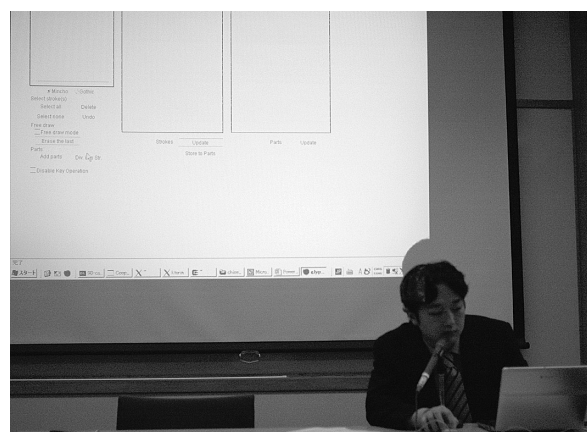
その次に師茂樹氏による「文字オントロジに基

づく文字オブジェクト列間の編集距離」はChaon モデル（CHISE の文字モデル）における編集距離を提案するものであった。師氏はまず編集距離の文字コード依存による問題点（「有」から「無」への置換と、「無」から「无」への置換が同じコストなのはおかしい、など）を指摘した上で、Chaon モデルに基づく編集距離の計算では、文字オブジェクトを木構造と見なした上で木の編集距離（TreeEdit Distance）を計算することを提案した。この発表の後の質疑応答では幾つかの問題点が指摘されたがそれはこの発表が可能性を感じさせ、想像力を喚起するものであったからだといえる。非常に盛り上がったセッションだった。

1日目の最後の発表は上地宏一氏による「KAGE システムによる漢字フォント制作支援」と題する講演で、漢字グリフ自動合成システム KAGE の最新動向の報告が行われ、KAGE のユーザーインターフェースとなる WWW アプリケーションの説明が行われた。また、師科研の助成を使って開発中の JIS X0208 を網羅する KAGE の新しいグリフデータが披露された。この他、



師氏の講演風景



上地氏の講演風景

CHISE 文字データベースの可視化システム「CHISE 漢字連環図」が発表されたがこれは一同の賞讃を浴びるものだった。

2 日目は橋本将氏、かずひこ氏による「全文検索システム Rast による全文検索アプリケーションの構築」と題する講演からはじまった。これは今話題の全文検索エンジン Rast に関するものである。Rast は新興のシステムだけあって、UTF-8 が利用可能であり、多言語・多漢字対応が可能である。橋本氏による発表は主に、文字列処理モジュールやテキストフィルタの枠組みによる拡張の容易さと、Ruby や Perl バインディングを用いたアプリケーションへの組み込みの容易さをアピールするものであった。一方、質疑応答では Rast の構造化データへの適用に関する議論が盛り上がり、BOF の時間を使って長時間にわたる議論が行われた。

次に川幡氏による IDS（漢字構造情報の Unicode による表記法）の正規化に関する話題提供がなされた。これは現状の収録文字数が非常に増



川幡氏の発表風景

えた Unicode の漢字を背景に、重複のチェックに IDS を使うために漢字の提案者に IDS の提出を義務づけることを目指し、その際に用いるための IDS の正規化手法を提案するものであった。その後、IDS 関連の議論が交わされた。

CHISE Conference 2005 は以上で終了したが、今回はこれに引き続く形で“CodeFest 京都 2005”というイベントを人文研大会議室で開催した。このイベントはフリーソフトウェアの振興事業を行っている NPO 法人「フリーソフトウェアイニシアティブ (FSIJ)」と共同で開催したもので、日本で 2 番目、関西では初めての CodeFest である。この CodeFest というのは、普段はインターネット上でのやり取りのみで Face-To-Face では話し合う機会が少ないハッカー達が一ヶ所に集い、Bug Squashing マラソン、ソフトウェアのリリース直前のとりまとめやリリース、新機能実装の披露など、自由にコード（ソフトウェアのソースコード）を持ち寄って頭を突き合わせ



橋本氏の講演風景



CodeFest のひとこま

て議論し、開発を進めるイベントである。今回の CodeFest は著者の段取りの悪さからはじまるまでが非常にスリリングであったが、無事成功裡に終えられたことを各方面の協力者の皆様に感謝したい。また、関西のフリーソフトウェアの開発者、特に、京大の学生諸氏のフレッシュな活動に触れることができたのは非常に良かったと思う。

参考文献

師氏「もろ式：読書日記」より

CHISE Conference 2005

http://morosiki.txt-nifty.com/blog/2005/10/chise_conferenc.html

CHISE Conference 2005(1)

http://morosiki.txt-nifty.com/blog/2005/10/chise_conferenc_1.html

CHISE Conference 2005(2)

http://morosiki.txt-nifty.com/blog/2005/10/chise_conferenc_2.html

CHISE Conference 2005 落ち穂拾い

http://morosiki.txt-nifty.com/blog/2005/10/chise_conferenc_69d5.html

かずひこ氏「ふえみにん日記」より

CHISE Conference 2005 で Rast の発表, CodeFest 京都 2005

<http://kazuhiko.tdiary.net/20051014.html>

CodeFest 京都2005二日目

<http://kazuhiko.tdiary.net/20051015.html>

三色の筆と XML 七変化

——校勘の技法——

岩井茂樹

幾世代にわたって読みつがれてきた書物は著者だけのものではなくなる。著述は文字によって表現されるが、文字は紙に書写され、あるいは版本に刻みこまれて書物の形をとった。特定の資料に基づいて著述に書物の形を与えるのは、読者でもある校訂者や刊行者、写字生などである。著者の手を離れた文字は、こうした作業の連鎖をつうじて読者の眼にとどく。伝承の長さと複雑さに応じて、本文に揺れが生じる可能性は大きくなる。書物は、著者の著述を伝えるほかに、本文の異同をつうじて、それがどのように伝承され、いかに読まれてきたかという情報を運ぶことになる。伝承のなかで、それを読み、また写し、さらには刊行する行為が、書物に別の情報を浸潤させているわけである。こうした作用の連鎖があるからこそ、校勘や本文批判が学問的営為として必要とされる。

清代中期の学者盧文弨（1717-1795）は、校勘した古典籍をみずから刊行することに熱心であった。『抱經堂叢書』に収める漢代から唐代の著作十数種がそれである。その盧文弨がどのような方法で校勘の作業を進めたかを窺わせる手沢の鈔本が伝わっていた。二十世紀の初頭、刑部の官僚にして法制文献の蒐集家であった董康（1867-1947）が架蔵していた鈔本『唐律疏義』三十卷、附図十二卷がそれである。今日、その行方は定かかでない。『唐律疏議』として知られている書を、「疏義」と題することからして珍本であるが、盧文弨が『唐律疏議』の宋本と元本を用いて校勘したところに、この鈔本の価値があった。それは、『唐律疏議』刊行のためだったかも知れない。しかし、実現しなかった。また、盧氏が用いた宋本や元本が、現存する版本と同じものであったか不明である。貴重な鈔本であった。

この鈔本を借用した沈家本（1840-1913）の証言（「鈔本唐律疏義跋」『寄篋文存』巻七）によると、そこには黄と藍と朱の三色の墨による校語が書きこまれていた。乾隆五四年（1789）に作成した鈔本にたいし、盧文弨はまず黄筆でこれを校正し、翌年にはさらに四日間を費やして別の版本と校勘し、その結果を朱筆で書きこんだ。藍筆の校語は更にその後のものかと思われる。二つの異本を対校するだけであれば、始めから朱筆を使うであろう。まず黄筆を使ったのは、それが「疏義」と題する底本そのものを正しく写し取るという準備作業だったからである。その上でさらに朱と藍を使い分けたのは、複数の刊本との対校の結果を一目瞭然とするために違いない。

これに類する校訂作業をおこない、ご自分の本を色とりどりの校語で飾った経験のある方も多いだろう。校勘に用いる本が二、三種類であれば、筆色の使い分けによって処理できる。しかし、これが一種、また一種と増えていくと困ったことになる。色鉛筆の種類は豊富だ。しかし、本の行間や餘白には限度がある。また、文字の異同にとどまらず、伝承のなかで節略や書き換えがおこなわれた書物となると、紙上の書きこみ方式では収拾がつかなくなる。附箋や追紙という手段もあるが、書きこみが錯綜すると、何が何だかわからなくなる。

何か良い手段がないか？ 電子本文を利用できないか？ 早くから行われているのは、異本ごとに、それに忠実な電子本文を作成する方法である。こうした異本の電子本文を複数作成すれば、相違箇所を対照表示したり、異同の程度を計測したりすることが可能になる。漢字文献の場合でも、異体字をどのように取り扱うかという問題を解決し

ておきさえすれば、本文比較のための専用ソフトウェアを利用することもできるだろう。

また、異本ごとに複数のファイルをつくるのではなく、一つの電子本文のなかに校訂情報を埋めこむ方法もある。TEI (Text Encoding Initiative) が SGML および XML によって電子本文を作成するための指針と文書型定義を公表している。文書の種別や電子本文作成の目的に応じて、複数の文書型定義を用意し、利用者が適宜それらを組み合わせて本文の印付け（マークアップ）をするための工夫がなされている。校勘のために使われるのは、<app> という要素である。例えば、異同箇所に必要なような記述をおこなう。

是年傳染甚多，予親事三人而 <app><lem> 不能染 </lem><rdg wit="Li-jielue"> 不染 </rdg><rdg wit="TW-ms"> 不染 </rdg><rdg wit="Yang"> 卒不染 </rdg></app>。
<app><lem> 人皆以爲有神佑云。 </lem><rdg wit="Li-jielue"/><rdg wit="TW-ms"/></app>
"app" は "apparatus" を略したもので、校訂情報を処理するさいの目印となる要素である。諸本間の異同は、<app> 要素の中に置かれる <lem> (lemma) 要素と <rdg> (reading) 要素および、それぞれの属性によって表現する。一つ目の <app> 要素では、<lem> 要素によって電子本文の底本とした本が「不能染」になっていることを示し、二つの <rdg> 要素によって、それに対する異文「不染」「卒不染」を示すと同時に、それぞれの属性 "wit" (witness) が版本名（略号を使用）を表している。この場合は、底本を含めて五種の本を校勘に用いているが、底本と同じく「不能染」に作る諸本は無視している。二つ目の <app> 要素では、底本では <lem> 内の一文が存在するが、空の <rdg> に対応する版本では略されていることを示す。別の種類の情報を属性として記述することも可能である。

この方法によって本文中に校訂情報を埋めこんでおけば、それを手がかりとしてさまざまな変換や表示をおこなわせることが可能になる。例えば、上に例示した <app> 要素の情報から、以下のような複数の提示結果を生成し、それを切り替えた

り、組み合わせたりするのである。

a. 文中の当該箇所に異文を提示。

是年傳染甚多，予親事三人而不能染〔不染〕〔不染〕〔卒不染〕^{*5}。人皆以爲有神佑云。^{*6}
(惲應明刻本，04/6b-04/7a)

b. 校注を生成して、段落の後にまとめて表示。

校注*5 李卓吾節略本作「不染」。明鈔節略本作「不染」。楊知秋校本作「卒不染」。
校注*6 李卓吾節略本無「人皆以爲有神佑云。」。明鈔節略本無「人皆以爲有神佑云。」。

c. 校訂に用いた本それぞれに忠実な本文を表示。

是年傳染甚多，予親事三人而 不染。〔人皆以爲有神佑云。〕(李卓吾節略本，03/6a-03/6b)

d. 校訂結果の一覧を表形式で表示。

版本名	ページ	相違点
惲應明刻本	04/7a	不能染
李卓吾節略本	03/6b	不染
明鈔節略本	3b	不染
楊知秋校本	05	卒不染

版本名	ページ	相違点
惲應明刻本	04/7a	人皆以爲有神佑云。
李卓吾節略本	03/6b	(なし)
明鈔節略本	3b	(なし)

(これらの全体は <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp:8080/yang/index.html>)

もちろん、XML 文書进行处理するプログラムを用意する必要がある。たしかに面倒であるが、いったん作ってしまえば、<app> 要素による校訂情報を挿入した XML 文書は、いずれもプログラムの部分的な書き換えによって対応できる。かねて校定を進めていた楊繼盛『自著年譜』について、年末年始を利用して、参照する版本を増やし、校訂情報つき XML 文書を作成してみた。上のような目的別の表示は、XSLT スタイルシートを書いて処理する。その結果表示は一目瞭然としてなかなか便利である。しかし、所詮ディスプレイ上の仮想的な文字列、伝承の歴史を感じさせる書物の重みはない。盧文弨先生にこれを紹介したならば、愛用の黄筆、朱筆、藍筆をふるい、三たび重ねて謝絶の意を示されるに違いない。

東アジア人文情報学研究会の意義

愛宕 元

2005年5月に発足した「東アジア人文情報学研究会」について、いわば受益者の立場にある人間・環境学研究科の側から本研究会の意義などについて、思い付くところを記しておきたい。

人間・環境学研究科の1学年の院生定員は修士課程が164名、博士後期課程が68名というかなりの大所帯であり、院生たちの研究テーマは文系・理系の両分野にわたって実に多彩である。その中で東アジア、とくに中国に関わるテーマを研究対象としているものは現時点で20数名を数えることができ、中国、台湾、韓国からの留学生がおよそ3分の1を占めている。これら院生たちがどのような研究テーマに取り組んでいるかを、その概略をまず紹介しておこう。

新石器時代の土器編年及び動物考古学

三国曹魏期における新しい人物評価の出現についての歴史的分析

三国蜀漢期における地域性と政権構造との関係
戦争形態の諸相から見た三国期の歴史的
特殊性と普遍性

入唐僧の目を通して見た唐代における日本・中国・朝鮮の国際関係

档案史料による清・露関係史の新たな可能性の探求

近世・近代における年画の製作とその社会的受容のあり方

上海租界を中心とした中国都市の近代化の諸相
甲骨文から所謂漢字への文字進化の過程

戦国時代における漢字の多様な展開

秦漢期における隸書の出現とその機能

元明期における六書学の発展

朝鮮における漢字音と中国語音韻学との比較研究

筆跡鑑定の手法を活用した契丹文字解読へのアプローチ

中国における絵画的地図から近代的地図作成への脱皮の過程

族譜の分析を通して見た東南中国における地域社会の形成に関する歴史地理学的研究

中世社会における神仙思想・道教思想の展開
日中比較神話研究

中世における茶文化の展開—唐詩に見える文人間の、文人と禅僧との茶を媒介とした交流—
明代後期の演劇とその社会環境

近代・現代中国社会におけるユダヤ人の動向
台湾におけるナショナル・アイデンティティーの形成

以上に概略を列挙した院生たちの研究テーマを見てもわかるように、考古学、中世から近現代に至る歴史学、前近代における国際関係論、古代から元明期にわたる文字学、中国と朝鮮の比較音韻学、歴史地理学、地図学、思想史、文化史、芸能史、社会史などなど中国を研究対象としながらも、問題関心のあり方はこのように広範囲にわたり、かつ多様である。

ここで本研究科の組織と研究教育上の特徴について触れておかねばならない。それは院生たちの研究環境の現状と密接に関わるからである。中国学を志す上記の院生たちの所属する講座は同一講座ではなく複数の講座にまたがっており、さらに本研究科の指導体制がもっぱら指導教員との個別の縦の関係の下になされているということがある。指導教員を同じくする院生はともかくとして、指導教員が異なれば同一講座に属する院生ですら日常的な研究上での交流は比較的少なく、いわんや講座を異にする院生の場合にはほとんど交流が

なされてこなかった。その意味で、広義での同じ中国学を研究対象とする本研究科の院生たちにとっては、必ずしも最適な研究環境であったとはいえないものであったことは率直に認めねばならないであろう。

2005年5月に発足した「東アジア人文情報学研究会」は元はといえば人文科学研究所の側から本研究科に対して申し出があったものであるが、本研究科としては願ってもないものであった。人文科学研究所は「京都大学21世紀 COE 東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 漢字文化の全き継承と発展のために」に現在精力的に取り組んでおり、国際的なシンポジウムやさまざまなセミナーを開催されてきている。同時に大学院生を対象とした研究面での支援活動をも幅広く実施している。2004年以来、毎年夏季に実施されている主として博士後期課程の院生を対象とした教育プログラム「インターネット時代の人文学の技術（スキル）—XML 世界への誘い—」もその一つで、中国学に関わる本研究の数人の院生がこれまで2年にわたり東アジア言語のコンピュータ処理、とくに漢字文化（Chinese Characters and Culture）に関するパソコン実習の特訓を受講するという恩恵に浴している。そして今回の研究会を組織しようではないかという申し出であれば、まったく断る理由などあろうはずもなく、ここに2005年5月より毎月1回のペースで「東アジア人文情報学研究会」を立ち上げたのである。本研究科に所属する中国学を研究対象とする全院生を結集した形で発足したこの研究会は、ほぼ1年が経過した現時点でいくつかの大きなメリットが認められ、また実際の好ましい効果が生じているように思われる。メリットとしては、毎回、2名ないし3名の院生に研究発表を課すことにしたために、各院生がこれまでに積み上げてきた事柄を研究発表として具体的にまとめる作業を促進した点がまず挙げられるであろう。研究会といういわば公的な場で自分の研究成果を発表することによって、分野を異にする教員あるいは他の院生たちからさまざまな質問、指摘、批判、あるいは有益なアドバイスなどが得られ、研究を進展させる上で少なからざる刺

激となっていると思われるのである。さらに研究会で発表した研究報告は原則として年度末に刊行予定の論文集に掲載することとされており、院生たちにとっては活字論文として業績となる場を新たに提供されたことになる。このことは院生たちにとってだけではなく、教育指導に当たる我々教員にとっても誠にありがたいことだと言えよう。本研究科においては、院生たちにとって最も身近な研究成果の公表の場として定期刊行されている紀要である『人間・環境学』、さらにはいくつかの講座が独自に刊行している講座紀要がある。ただこれらは紀要一般の例にもれず、閱讀される範囲が比較的限定されるということがある。また『人間・環境学』の場合は、既述のように、本研究科の特色である文系・理系を包括した複合型の大学院組織であることから、各巻の掲載論文の内容はきわめて多分野にわたるものとなっている。ちなみに最近巻の掲載論文を見てみると、教育学、演劇論、フランス言語学、病跡学、精神分析学、ルネサンス論、ドイツ文学、絵画芸術論、中国茶文化論、中国古代文字論といった内容となっており、まさしく本研究科の特色をそのまま反映した多彩でユニークなものと言えるが、その反面で掲載論文が多岐にわたるがゆえに全体としていささかまとまりを欠く嫌いがあり、個々の論文がそれぞれの専門分野の研究者の目に触れることがあまり多くはないのではなかろうかという危惧を抱いてきたのが偽らざるところであった。それに対して今回新たに発足した「東アジア人文情報学研究会」の論文集は、本研究科の東アジア、とくに中国を研究対象とする院生を結集して彼らの研究成果を公刊するものとなっており、先の危惧は大幅に軽減するものと期待されるのである。また学術雑誌への投稿に際しては枚数制限のため、地図、図版、写真、表などを不本意ながらカットせざるを得ない場合が少なくないが、今回の論文集では原稿の枚数制限はかなり緩和されており、地図や図版の類を挿入した力作が掲載されるものと期待している。現在、創刊号の編集が進行中で、3月中には刊行されると聞いている。大いに待たれるところである。

「東アジア人文情報学研究会」が発足してほぼ1年が経過するが、講座を異にする中国学を専攻する院生たちの間に横の連繋ないし交流関係が生まれてきているように感じられる。指導教員と個々の院生というもっぱら縦割り中心の研究・教育上の関係を、いささかなりとも補完する横の交流関係が本研究会によって形作られてきたことはきわめて好ましいことであって、このような院生間の交流をより強めていくためにも、この研究会が今後とも長く継続されることを希望したい。

Chinese Characters
and Culture



発行日 2006年 2 月28日

発行者 文部科学省21世紀 COE プログラム

「東アジアにおける人文情報学研究教育拠点—漢字文化の全き継承と発展のために—」

住 所 〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47 京都大学人文科学研究所

電 話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

e-mail coe@zinbun.kyoto-u.ac.jp • Web Site <http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

